

## グループ討論（全体会におけるグループ発表）

授業①と授業②の終了後に、生徒の皆さんには6グループ（ア～カ）に分かれて、グループ討論を行っていただきました。各グループでは、高校の先生方などをファシリテーターとして、生徒たちが司会や発表などの役割を分担することにしました。

アからウの3グループは授業①、エからカの3グループは授業②に関する内容について、授業の中で各講師から提示された課題について討論し、その結果を、その後の全体会で発表していただきました。

全体会では、各グループの発表、生徒間の質疑応答の後、ファシリテーターの先生からコメントを、講師の中西先生と杉山先生からは講評をしていただきました。

以下は、グループ発表を中心とする全体会の記録です。

### 1 グループ ア・イ・ウの発表

#### 討論の課題（中西先生提示）

授業①「ガザ戦争の人道危機はなぜおきたのか」を踏まえて  
質問1 ガザ地区とヨルダン川西岸のパレスチナ人の置かれた状況はどう違うか。  
質問2 ガザ戦争を終わらせるのに、①アメリカができること、②日本ができること、③国際社会ができること。3つのうち、1つか2つを選んでください。

#### 【グループ ア】

参加生徒：5人、ファシリテーター：金子章生先生（瑞陵高校教頭）

- ・私たちは、質問1と、質問2のうち「国際社会ができること」について、話し合いました。
- ・質問1については、「自由さ」が違うとの結論になりました。ヨルダン川西岸は出稼ぎには行けるし、食料の支援も受けやすい状況にあります。
- ・だけど、ヨルダン川西岸は、自由があるからといって安全かというところではなく、まだ今もじわじわと攻め続けられている状況にあるので、今後はガザみたいにフェンスに囲まれる可能性もある。フェンスに囲まれてしまって、もしかして、食料も届かない状況になってしまうかもしれない。その場合はどうなるのかと言うと、ガザ地区って、今は入植地がないんですけど、中西先生のお話を聞くと、昔はあったそうなんです。ユダヤ人が住んでいた入植地が。で、今はない。じゃあ、なぜなくなったのかという話なんですけれど、昔は居て、今はユダヤ人が居なくなったということ。そこで、「あ、平和が訪れるのかな、発展できるのかな」と思っていたらしいですけども、中西先生がおっしゃるには、なぜユダヤ人が急に出て行ったかというところ、イスラエルが攻撃しやすい状況をつくるために居なくなったんです

て。イスラエルはユダヤ人の味方なんです。つまり、どういうことかということ、ガザ地区を一旦撤退したのは、今居るパレスチナ人を集中攻撃するためだったんです。じゃあ、これって、ヨルダン川西岸に起きないかということ、そうとは言えない。もしかしたら、そういうことが起きるかもしれないから、そうした対策を、今後も練らないといけないなという考えに、私たちのグループはたどり着きました。

- 二つ目は、国際社会が何をできるかという課題についてです。すごく難しい議題で。私たちのグループでは、もういっそ、国境をなくしてしまおうとか、地球まるごと一つの国にしてしまおうとか、てんやわんやな発想がいっぱいあったんですけど、それじゃあ、いけないんで、自分たちなりに考えてみました。
- まず、アメリカが拒否権を持っていたり、国連が平等に見えつつ、実は平等ではないと気がついたのです。まず、新しい国連に似た組織を作ろうかと思ったんです。それはどういった組織かということ、全ての国を平等な立ち位置に置く組織です。それが先進国であろうと、発展途上国であろうと、みんな同じ地位で、他の国を支援したり、支援し合えたりする組織を作る、という考えになりました。
- 今、中国やアメリカが、片一方に支援しようとしているんです。けれど、これって、支援したところで解決にならないんです。食料の支援は来るかもしれないけど、戦争の解決にはならない。だから、アメリカが付いてるからとか、中国が付いてるからとなると、余計にまたややこしいことになる。まず、この組織のルールの一つは、その国に何か支援がしたいなら、二つの国へ平等に配給を与えろとか、二つの国を平等に支援する。支援する量も同じ。支援したいなら、支援する国は、一つの国だけではなくて、戦っている国にも支援する。
- もう一つのルールが、全ての国は仲介者になる。パレスチナとイスラエル、これは当事者の問題であって、当事者同士が解決すべき問題であると考えました。だから、他の国がとやかく言っても、また前みたいに、壁を登って、もう一回このような悲惨な戦争が起こってしまうかもしれないから、当事者同士で解決するために、あくまで仲介役の立ち位置として支援すること、それが新しい組織のルールという決めごとをしました。この組織のいいところは、絶対に平等なので、アメリカが拒否したからといって、大統領を逮捕できないということはないです。平等だから逮捕できるし、アメリカの力が強いからといって、それに引っ張られるということはないです。平等だからこそ、平和な当事者同士の解決ができる組織を作ることになりました。
- もう一つ、この組織を作ったら、やりたいことは二つあります。一つ目は、今捕われている人、逮捕されている人たちを、まず一旦還す。人間は兵器じゃないです。この思考がそもそもおかしいんです。だから、まず捕らえた人を還せと組織が支援します。だけど、それは、一方の国に偏って支援するってことは無しです。仲介役で、お互いの話を聞いて。仲介役として入って、還してもらおうような仕組みを作り

ます。まず、人間を出すことが非人道的であるので、それを止めます。

- もう一つ、最後に言いたいことは、standing together。これ、一回、政府によって止まったんです。トップ同士がこんな争いをしているわけで、市民は、戦争がしたいかという、絶対そうじゃないです。戦争したいですか、皆さん。したくないですよ。したくない人、手を挙げて。したくないでしょ。だから、市民が団結すれば、変えられるんです。今、トップが、市民は俺らの言うことを聞いてくれるわ、みたいな感じにいるから。市民は戦争の被害者になるしかないから、まず市民が団結しよう。standing together だから、お互いに立ち上がらなければいけないです。片方の国が立ち上がっても駄目だし。だから、私たちは、このイスラエルとパレスチナの問題が解決するためには、その国同士の人が話し合う必要があると思ったんです。この話し合う機会をどう設けるかという、さきほどの組織が手伝うんです。安全な所に避難させてあげて、その新しい組織の人たちが見ている中で、話し合わせるんです。その話し合いのルールは、絶対、宗教の話をしてない、戦争の話をしてない。このルールを設けて、まずは仲良くなることから始めようと思ったんです。お互いに、「あっ、意外といい人じゃん」、「えっ、全然、気が合うじゃん」とか、「えっ、LINE 交換する?」とか。そのくらいの仲良い空間を作って、お互いに理解し合えれば、結果的に平和になるんです。政府が「あの国は、俺らを攻撃している悪者だ」と言えば、洗脳されちゃうんです、その国に閉じ込められているから。けれど、他の世界を知っていけば、「そんなことないじゃん」、「いい人いるよ」、「この戦争、意味なくない?」となって、私たちは、止まると思ったんです。だから、私たちは、この組織を作ったら、もしかしたら、パレスチナとイスラエルに平和な未来がまた訪れるかもしれないと考えました。以上です。

## 【グループ イ】

参加生徒：5人、ファシリテーター：神谷貴司先生（一宮高校教諭）

- 私たちのグループでは、まず、質問1について話し合いました。話し合った結果、ガザではハマスが政治を行い、ヨルダン川西岸ではファタハが政治を行っているけど、なぜ、そうした違いが生まれてしまったのか、見えてきました。ガザとヨルダン川西岸との状況を比較したところ、ガザは、まず人口密度がヨルダン川西岸に比べて圧倒的に高い。それによって、インフラが全然違う。ヨルダン川西岸も、日本みたいにとっても良いわけではないけれども、ガザに比べたら、ヨルダン川西岸の方がインフラは整っている。そして、先程のグループでも出ましたが、ガザでは出稼ぎが不可能に近い。それに対して、ヨルダン川西岸は、許可証があれば、壁を越えて、出稼ぎをすることができる。そういった自由の違いがあります。
- ヨルダン川西岸は、もともとパレスチナ人が住んでいた地域が、今、そのままパレスチナになっている。それに対して、ガザは、もともとそこに住んでいた人じゃな

いのかな、と思いました。ヨルダン川西岸は、エルサレムに近くて、もともと人がたくさん住んでいた地域のような感じがするけれど、ガザは海沿いで、そこまで人が住むのに適した地域ではなくて、もともと人がたくさん住んでいた場所ではない。中東戦争前後の地図を比較したら、今のガザは、パレスチナ人を端に寄せたような場所。もともとガザは、住みたくて住んでいるわけじゃなくて、イスラエルが進軍してきたから、仕方なくそこに住んでいるという人が多い気がして。ガザは、難民で、また貧しい人が多いという感じがします。やっぱり生活状況が、ヨルダン川西岸から見たら、ガザの方がとても悪いのではないかと思う。生活状況の悪さという、人々の不満が、イスラエルへの憎しみにつながっていて。その人々の憎しみが、ちょっと偏った強硬派の姿勢を見せているハマスの支持につながってしまっているのではないかと思いました。それに対して、ヨルダン川西岸は、ガザに比べたら、それなりにゆとりはあるので、割と保守的なファタハの支持につながっているのではないかと思いました。

- 続いて、質問2については、私たちは日本国籍を持っているので、日本ができることを中心に議論しました。まず日本は、アメリカと相互に癒着している関係で、自主性がすごく低いと思ったので、アメリカと相互に癒着している関係を改善して、日本が自主性を持てるようにするというのが、大きな目標なのかなと思いました。国民の中にも、パレスチナを助けたいという人がいるのに、アメリカ寄りな政策をする人たちに意見が潰されているということがあると思う。そういった状況を変えて、日本が自発的に、国際社会に訴えるという状況を作ることが、まず第一に必要なだと思いました。ただ、確かにそれができればいいなあと思ったんですけども、今すぐにできる話ではないなあと思いました。十年とか、長い目で見てできることであって、今すぐにガザの状況を変えられるには、ちょっと難しいかなと思いました。
- やはり日本は、世界の大国であるアメリカと近い関係なだけに責任もあるのかなと思いました。そこから、アメリカにできることにつながってくるんですが、アメリカが、今、イスラエルにたくさん軍事支援をして、戦争をより助長していると思うので、日本は、アメリカにイスラエルへの軍事支援を止めるように働きかける必要があるし、アメリカは、その軍事支援を止める必要があると思います。
- そこから、国際社会にできることに話が広がっていきまして、まず国際連合の問題として、拒否権を廃止することが必要なのかなと。拒否権があることで、大国の意見が強くなって、途上国の意見が潰されているという状況が今あるので、国際連合憲章を改定して、拒否権を廃止する必要があると考えています。
- また、イスラエルへの経済制裁を行う必要があると考えています。今の国際社会は、イスラエルに対して、あまり大きなこと、アクションを起こせていない。傍観しているような感じになってしまっているの、イスラエルが戦争を続けづらい状況を、

世界で作っていく必要があるのかなと思っています。今、やはりイスラエルに好き勝手にやらしているような印象を受けるので、経済制裁を行って、戦争を続けることを難しくすることによって、イスラエルの世論とかも、戦争を止めるように傾いてくれたらうれしい。政治家たちがこのままではまずいなと気づくだろうし。やはり経済制裁を行うことは一つ大事だなあと思います。

- ・今の状況は、イスラエルとパレスチナが、それぞれ価値観が違って、お互いの価値観をなかなか理解できていない。それによって、争いとかが続いていったんで…。仲介できる国を、国際連合で募って、双方の合意点を見つける。双方が納得して停戦できる状況を、そういった合意点を見つけることがとても大事なのかと思いました。お互いが納得できないままに停戦しても、また、次の戦争が始まってしまいますので、新たな争いにつながらないように、双方の納得できる合意点を見つけて、お互いが納得して停戦するということが大事じゃないかと思いました。

## 【グループ ウ】

参加生徒：4人、ファシリテーター：植木佐織先生（一宮西高校教諭）

- ・最初に、質問1についてですが、私たちのグループでは、主に四つ違いがあるなと思いました。
- ・まず一つ目は、自由さでの違い。例えば、ガザ地区はフェンスで囲まれているから、外に出るのがすごく難しい。だからこそ、物資がなかなか届きづらい。ヨルダン川西岸では、検問所を通過さえすれば、外に出て、出稼ぎをすることが可能だから、ガザに比べたら、自由が利く。あとは、支援がガザよりも豊富である、というところだと思います。
- ・二つ目に、面積についてです。ガザは、見れば分かるけど、滅茶苦茶小さい。だからこそ、人口密度の高さに直結してくると思います。それに対して、ヨルダン川西岸はガザの15倍あるので、そこまでは小さくはないのかなという印象です。
- ・三つ目は、主な勢力についてです。ガザはハマスが勢力を握って政治をしているのに対し、ヨルダンではファタハが勢力を握っているというところも大きな違いとしてあると思います。
- ・四つ目が、国際社会の受け入れの違い。日本も含め、結構数多くの国が、ガザ地区のことをテロだと思っているからこそ、ガザを国際社会に受け入れない、排除するという現状が今あります。対して、ヨルダン川西岸は、国連のオブザーバーとして、国際社会には割となじめているという印象があります。それが、インフラがある程度整っているということにもつながるかなと思います。
- ・あと、質問とは少しずれるんですけども、グループでガザ地区かヨルダン川西岸地区に住むなら、どちらがいいのかということ进行讨论してみた結果、満場一致で、ヨルダン川西岸でした。理由としては、外に出ることが割と容易だからというのと、

犯罪の件数が多いイメージがあるけれども、ガザに比べたら死者数が少なく、まだ安全そうだなということで、私たちはヨルダン川西岸地区に住みます。

- ・次に、質問2の「ガザ戦争を終わらせるためにできること」ですが、どの国にも影響力を及ぼすのがアメリカの特徴だと思っているので、まず停戦に積極的な行動をするのは、アメリカからだと思います。その後、いろんな国が続いて、「私も停戦」「私も停戦」という感じでできればいいなあと思っています。
- ・国際社会ができることなんですけれども、もっとガザについて知るべきだな、というのが一番です。ガザの検問所の数すら知らない、というのは、本当にガザが孤立していることをすごく象徴していると思うので、物理的にも、政治的にも、ガザ地区を排除せずに、「守ってあげる」と言っただけ、戦争を終わらせるためにも、もっと排除といった現実を変えていく必要があると思いました。
- ・停戦するために、どうしたらいいんだろうと考えていくうちに、そもそも私たちは知らないことが多すぎるなあという結論に至りました。例えば、知りたいことは何だろうと挙げてみたんですけれども、オスロ合意が過去に成立していて、3人の男性(イスラエルのラビン首相、PLOのアラファト議長、アメリカのクリントン大統領)の写真を見ると、超幸せそうで、めっちゃいい感じなんです。そんな単純じゃないと思うんですけれども、オスロ合意がなぜ成立したのかということを知ること、そこから何か、今のこの戦争を終わらせるヒントがもらえるのかなと思いました。
- ・このガザ戦争というのが、物資であったり、私たちの身の安全であったり、どういう影響をこの日本にもたらすのかということを知りたくて。そういうことを知ると、この戦争をより身近に感じられて、停戦への運動というのが、当事者だけでなく、世界中に広がっていくと思うので。もっともっと自分たちの未知を自覚して、それを知ろうと努力することが大切だと感じました。

## 【質疑応答】

質問者：グループ・アの方に質問です。新しい組織のルールとして、「宗教についての話をしない」とのことですけど、戦争とかの原因は、だいたい宗教が第一なので、宗教の話をしないというのは、根本的解決から離れると思ったのですが、どうでしょうか。

回答者：あまりそれについては議論していなかった。私も仏教校なので、宗教の授業があるのですが、割と宗教って、歴史が長いし、物語みたいな感じで。それを突き詰めてしまって、じゃあ、これでいいねって結論出るとかなあと思って。戦争って宗教間の問題というけど、それを「認めろ」ということじゃなくて、互いに「ああ、こういう考えなんだ」と認め合って進んでいくのが、平和への一歩であって。「おれの宗教、認めろよ」というものじゃなくて、「あっ、こういう考え方もあるんだ」、

「けど、私たちはこうだよ」というように認め合える話し合いをすることが第一歩じゃないかと思う。「話さない」というのは、二つ目の standing together の時に使うものであって、組織の議論の際では、絶対話していいと思っています。

質問者：引き続き、グループ・アの方への質問です。面白かったんで。みんなで、平等な組合みたいなものを作るとおっしゃっていたと思うんですが、権力は同じにしても、経済的とか、武力的な核の傘とかあるじゃないですか。どう頑張ってもそこで、表面的には平等であっても、見えないところで上下関係とかあると思うんですよ。そこから、アメリカとかが、日本に「おまえ、こっちにしろ」とか。やらせみたいなのがたぶん起きるんじゃないかと思うんですけど、その辺はどうやって対策するとかは、いかがですか。

回答者：いい質問ありがとうございました。これは、自分の個人的な意見なんですけど、なんで戦争とかの問題が起きているかという、僕的には、一番国境が問題なんだと思います。例えば、身近な例でいうと、三兄弟で、長男とか、一番上の立場にいる人が権力強いということになっちゃっているけれども、実際は人間という共通点があるから。ちょっと難しいけれども、個人的には、国境をなくして世界を一つにしちゃえば、問題はないんじゃないかと思います。でも、そうしちゃうと、さっきの質問にあった宗教的なことも絡んでくると思うんですけども。宗教で決定的な違いが何かと考えたら、僕的には、神が違うことかなと思います。イスラム教ではアッラーとか、仏教では仏様とか、違いがあるんですけども。宗教も一つにしちゃえば問題は起きないんじゃないかと。要は、一つにしちゃえば、何でも解決できるんじゃないかと思います。

## 2 グループ エ・オ・カの発表

### 討論の課題（杉山先生提示）

授業②「地球沸騰化時代、私たちは何をすべきか」を踏まえて

質問1 国際的にも日本国内も、2050年までに「脱炭素社会」または「カーボンニュートラルの社会」を目指しています。どのような社会を創っていけば良いでしょうか？ あなたが2050年に実現していきたい社会は、どのような社会ですか？

質問2 質問1で考えた「未来の社会像」を実現するために、今からどのようなことをすればよいでしょうか？ あなたは、何をしますか？

### 【グループ エ】

参加生徒：4人、ファシリテーター：山本孝次先生（刈谷北高校教諭）

・まず、私たちが考えた、どういう社会を創っていけばよいかという点は、「無意識

に自然に配慮できる社会」です。ちょっとどういう意味か理解するのは難しいと思うんですけども。人々が、義務感で行動するのではなくて、自然と無意識にできる社会を創るということです。

- 以下の三つの例を説明します。これはとても極端な例で、実現することは難しい例なんですけれども。「エコカーしかない社会」、「太陽光発電が勝手に付いてくる社会」、そして「完全なリサイクル」、この三点を挙げました。今は、ガソリンで動く車とEV車とか、エコカーとか、どっちもあるんですけども、それを統一で、エコカーのみにしてしまう、ということです。そして、太陽光発電が市営には必ず付いているという大前提で、家にも、もともと付いているというような感じで。完全なリサイクル社会というのは、その名のとおりで、分別して完全にリサイクルする社会です。
- これらを実現するために、私たちが何をすべきか、何ができるかということなんですけれども、まずは環境問題について知ることが一番大切だと思っています。私たちは環境問題に関心があって、この場にいるわけですけど、みんながみんな知識があるというわけではないので、教育課程で環境分野を取り入れるということが、知る面では一番大切なのかなと思っています。それに伴って、政治家が学生と対談できるという機会を設けるということです。政治家と学生が話す機会というのはあまりなくて、そういう機会を設けることで、直接、質問をすることができるから、私たちの心配事とかを話す機会を設けることで、政治家の人たちが、もう少し環境の面について、何か政策を行ってくれたりとかするかなということで、それを取り上げました。また、ポイント形式に変えるということです。リサイクルとかを自主的に行った時にポイント形式にすると利益が還ってくるから、やる側としても意欲的にやれるかなということで、一番最初に出た案でした。そして、ガソリンスタンドを水素ステーションへということなんですけれども、ガソリンで動く車を廃止することを実現したいということなので、ガソリンスタンドではなく、その他の水素とかを取り扱っているステーションに変えるということです。そして、法律で義務化というのは、太陽光発電のことなんですけれども、法律で太陽光発電が付いているような家にするということが挙がっていました。
- 結局、自分たちが創っていきたい社会というのは、極端で夢物語のような感じがするんですけども、まずは知ることからというのが大事だと思うので、私たちは、まずは「人々が環境問題を身近に感じるができるようにしていく」ということからなのかなと思います。

## 【グループ オ】

参加生徒：4人、ファシリテーター：長江孝継先生（星城高校教諭）

- 私たちは、地球沸騰化時代に何をすべきかについて話そうと思います。





- これ（左図）が2050年の熱田区です。
- 熱田区のいろんな家、公園の屋根のある所に太陽光パネルを付けようというものです。そうすると、再生可能エネルギーでたくさん電気を作れて、いいね!となっていくと思います。これが名案なんですけれども、今私が外を歩いていると、公園

には誰も居なくて、子どもも遊んでいなくて、とても寂しい思いをしています。それで、子どもをもうちょっと外で遊ばせたいと思っている親御さんもいるけど、外が暑すぎるから、子どもを遊ばせられない、かわいそうだなあ、と思う人がいると思うんです。そこで、公園にシェードを付ける、そしてミストも付ける。そうすることで、絶対涼しくなると思うので、付けたらいいかなあと考えて。実際にどこかの幼稚園でシェードを付けてみたら、外より4℃下がって、お子様もたくさん遊べるようになって、うれしいなあと言っていたので。それを公園に付けることで、地域の人も遊べるのかなあと考えています。子どもが外で遊べるようにという目標です。

- 次に、熱田神宮の周りに、森林や川を増やす。そうすることによって、光合成の効率を上げて、二酸化炭素を減らしていこうという取組を考えました。やはり木陰があった方が、外を歩いている人も涼しく感じられるので、とても名案かなと思っています。
- 次に、空飛ぶ車です。例えば、配送業とかに使う車を全て空飛ぶ車にします。そして、その空飛ぶ車は電気で動いています。AIとか。電気を使ってAIも使う。そうすることで、2030年問題として、配送業の従業員が少なくなって問題になるところをカバーしていくこともできるので素晴らしいと思います。
- 次に、風力発電を増やして、環境に良い街づくりをします。今は火力発電とかに頼りがちなんですけれども、そこを再生可能エネルギーに変えていくことで、環境に良い街を創ります。
- それと、先生もおっしゃっていたんですけども、公園に農場を作る。共同の農場によって、みんなでコミュニティを作ることもできるし、地産地消にもつながると思うので素晴らしいと思います。地産地消にすることで、配送するためのトラックの必要がなくなるので、二酸化炭素の削減にもつながると思いました。
- そして、「未来の社会像を実現するために、今からどのようなことをすれば良いのでしょうか」ということなんですけれども、私たち若者の政治参加を促すことが一番大

事だなと思いました。こういう公園を農場化するとか、公園にミストを付けたりするとか、そういうことに決定権を持つのは、市とか国とかなので、それに参加しないと、私たちの言いたいことが伝わらないということがあると思うので、政治関心を高めていこうと思います。最近、都知事選で石丸さん、皆さんご存じですか。その人が TikTok とかで、ちょっとバズっていたんですよ。TikTok ユーザーからは、「石丸さん、ちょっといいんじゃない。この人に投票してよ」と、投票権を持たない人たちも、若干、政治に興味を持ったかもしれないんですよ。なので、TikTok とか、メディアとかを使って、政治家の人たちが公約を伝えていく、そして若者の政治参加を促す、それがいいと思います。若者には、「私が投票したって、どうせ変わんないし…」と思っている人も多いと思うんですよ。だけど、これはチリツモであって、みんなが興味を持てば世界は変わってくると、私たちは思っております。

- ・それと、小さい頃から環境に興味を持っておく。ここで、小さい頃から環境に関わってきた人に発表が変わります。
- ・私は、登山とか、自然が大好きで。昔から環境について考えたりする機会が多かったです。私は、すごく環境について身近に感じているんですけども、最近の人たちってどうしても、スマホ見たりとか、あまり。私は、親の影響を受けて、環境についてとか、自然についてとか知ろうとしたので。みんながどうやって、環境を好きになるのかなと思ったときに、やはり周りの人から影響も受けて、いろんなことを知っていったりするの。まずは小さい頃から環境について学ぶ機会があれば、将来どうやっていい街づくりができるかということを考えるいいきっかけになると思います。
- ・小さい頃の経験が将来につながるということで、小さい頃からいろいろな環境についてのイベントに参加できると、環境についてもっと知る機会になると思うので、これを促進できたらいいと思います。

## 【グループ カ】

参加生徒：4人、ファシリテーター：山田知子先生（愛知淑徳大学教授、前一宮高校長）

- ・脱炭素社会を目指すために、私たちのグループで考えたことの一つ目は、エコな車を社会に普及させることです。そういう車って、結構高いので、政府が補助金を出して、みんなが買えるようにするということです。二つ目は、CO<sub>2</sub> を減らすだけでなく、CO<sub>2</sub> を吸収する植物をたくさん植えて、酸素を作ってもらうために、全部の家に緑の蔓みたいなものを付けて、街を森にしまえばいいんじゃないかと思いました。三つ目は、再生可能エネルギーを増やすために、再生可能エネルギーには欠点もあるから、それを研究する人たちに研究費を出すということができたらいいなと思いました。
- ・質問2で、私たちが考えたことは循環型社会です。そのために、私たちができるこ

たとえば、ゴミの分別であったり、リサイクル商品を買ったり、服のリメイクをしたり。本当に小さいことばかりなんですけれども、食品ロスをなくしたり、地産地消とか、要らないもの・必要ではないものを買わないとか、本当に当たり前のことを考えました。

- ・また、捨てるものをなるべく減らすために、リサイクルを前提とした商品を買ったり、中古品をなるべく買ったり。マイボトルやマイバッグを持って行って、活動することも大事だと思います。あとは、よく農家などで捨てられてしまう、形の悪い野菜とかをなるべく買ったり、安く売ったり。過剰包装、要らない包装とかすぐに捨ててしまうものは、最初から要らないと言ったりすることで、ゴミを減らしたりできると思います。

### 【質疑応答】

質問者：複数のグループで、太陽光発電を充実すれば、再生可能エネルギーがより発展して、二酸化炭素排出量が減るということを書いていたんですが、再生可能エネルギー、例えばソーラーパネルでも25年から30年で使い物にならなくなり、鉛やカドミウムなどを含んだ、リサイクルや廃棄が難しいゴミになって、それがものすごく問題になっているんですけれども、原発とかは視野に入れているのかと思って、質問させていただきました。

回答者：先生の話にもありましたように、化石エネルギーが増えると環境に良くないですね。なので、再生可能エネルギー、風力だったりを利用すると非化石エネルギーになって、環境に優しくなるという点で私たちは考えました。

回答者：私たちのグループは2050年の話をしているんで、たぶん2050年ぐらいになったら、太陽光パネルもいい感じのリサイクル方法が見つかるかもしれないし、太陽光パネルを超えるものが新しく出てくるかもしれないので、そこは考えなくてもいいのではないかと、私は思いました。あと、私たちは2050年の熱田区なので、家の隣に原発がというのは、ちょっと怖いなと思う人が多いと思うんですね。だから、私たちのグループでは、ここに置くのは大変危険ではないかと思っています。住む所と原発は分ける必要があるかなと思います。

質問者：風力発電を増やすと言っていたんですが、地震大国の日本で、どのような所に、風力発電のプロペラを置こうとしているのかと思ったんですけど。まさかとは思いますが、浮かしたりしないですね。

回答者：浮かしたりはしないですね。浮かすと、やはり車が通ることも考えているので、危険も考えて、それはしないんですけれども。私たちが考えたのは、再生可能エネルギーが、私たちの暮らしの中に溶け込む、という構想を考えたので、この街の

中に、風力発電を入れるということを考えました。

質問者：私は、質問がしたいというよりも、皆さんに提案をさせてほしいです。皆さん、共通して、エコカーを普及する、電気自動車とか水素自動車とか、そうした話をされていたんですが、今あるものを活用するという考えがあってもいいのかなと思って。皆さんの身近に電車があるじゃないですか。すでに、電気で動いている、日本には電車がいっぱいあるので。水素自動車とか、エコカーとか、素晴らしい案だと思うんですけど、そこまで難しいことを考えなくても、例えば、電車に乗るようにするとか、普段の移動を車じゃなくて電車を使うようにするとか、そういった小さな心がけで、一人の行動で二酸化炭素の排出量が減らせると思う。物流の問題も触れていたけれども、貨物列車があり、貨物列車はすごくたくさん運べる、一本の列車でトラック 24 台分運べるから…トラック 24 台分の荷物を一人の運転手が運べるから。今あるものを活用して環境問題に取り組む、新しいものを頑張って生み出すというのも素晴らしいと思うんですけども、今あるものをうまく有効活用して環境問題に取り組んでいくという考えがあってもいいのかなと思いました。

### 3 ファシリテーターのコメント

植木先生：今日はガザ戦争のグループの担当をさせていただきました。私自身は世界史を担当していますので、パレスチナ戦争の授業はもちろんやります。でも一番最後のプリントなので、もう目の前に共通テストが迫っていて、詳しく話し合ったりすることができない内容なんですね。そういう意味では、私自身も、専門家の先生からお話を聞き、そして皆さんとお話できたことが本当に楽しくて、いい1日だったなと思っています。ただ、私自身も含めて、やはり話し合うためには、いろいろな知識が必要だなとか、知りたいことがまだまだあるなあと思いました。これは、今日で終わりではないので、今後も引き続き、共に学んでいけたらいいなと思っています。今日はありがとうございました。

長江先生：私は、オの熱田区軍団の担当をしました。ちょっとフォローさせていただきます。大きな未来予想図とか、テーマについて考えるということで、4人の生徒たちはいろいろ考えてくれました。今は現実的には無理な話ですけど、ある程度未来を考えてやっていこうと考えたら、ああいった大きな話になって。じゃあ、それに向けてどうするかと話し合いをしてもらいました。話し合いをしている中で、個人的には、一つ一つの問題をどうやって解決するのかと心配していたのですが、4人とも、ものすごく楽しそうにやっているの、何も言えず。私がうれしかったのは、この4人が、最後「発信」というキーワードでまとまってくれたんで

す。チームのリーダーの生徒が言ってくれたんです。企業とか CM をやっているところに関して、その発信を、今の時代だから、個人が発信するものを、企画を作っていた方がいいんじゃないか。企業と個人。今、ユーチューブやいろんなところで CM とか作ると思うんですけども、そういったところで発信していった方がいいんじゃないかと。さっきもありましたけれども、政治との関係ですけど、これもやはり自分たちがやっていくという意味でも、政治に参加してやっていかなければならない。政治家の SNS を使ったというところで、TikTok の話ですね。そういうところで、どんどん若い人たちに広めていかなければならない。あと、最後に環境の問題で、いろんなイベントをどんどんやって、そういったところで、人とつながって発信していかないといけないんじゃないかとまとめてくれて、私は非常に感動しました。こういう勉強会で、今日学んだことを、どうやって皆さんに伝えていくとか、「発信」というところを、うちのチームのリーダーが言っておりましたので、そこに 4 人が一緒にたどり着いたというのは、大変面白かったと思います。4 人の皆さん、面白かったです。ありがとうございました。

#### 4 講師の講評

杉山先生：皆さん、どうもお疲れさまでした。皆さんの発表を聞いて、本当に驚きと感動を覚えました。短い時間でのディスカッションがとても充実していたようで、良かったと思います。個別のコメントは時間があまりないので、私は温暖化の方の 3 つのグループ全体について、少しコメントさせていただきます。未来を語るというのは、多分とても難しかったと思います。でも、そうした中で、皆さんが出してくれた視点が改めて分かって、私はとても良かったと思っています。皆さん、今日のディスカッションだけで、答えが出るわけではありません。私が今日、最初に言ったように、シングルアンサーはないのです。例えば、太陽光発電を入れれば、それで解決するわけではありません。太陽光発電にも問題があります。ですから、それを知ったうえで、考えていかなければいけません。そうすると、もっともっと、皆が勉強しないといけなくなりますよね。だから、今日改めて、知らないことがいっぱいある、もっと勉強しなければいけないんだということを知ってもらったというのも、とてもいいことだと思います。

- それから、私が「はっ」と思ったのは、小さい時からの経験が大事だという話でした。教育という問題だけじゃなくて、生活をしていたり遊んだりする中での経験を積んでいくというのが、皆さんにとって、とても重要な経験なんだなということ、私は今日学ばせてもらいました。
- 今、環境問題、気候変動の問題だけでなく、とても問題となっているのは、人間が、この地球上の生態系の中の一部でしかないはずなのに、それを飛び出してしまっ

いること。その大きなサイクルの中に戻れなくなっていることが、問題なんじゃないかと私は思います。だから、それを改めて考え直すこと、それを皆さんにぜひ改めて知ってもらいたい。私は、ガザの問題を話し合った人たちにも、ぜひこれは考えてもらいたいと思っています。

- 環境問題は、気候変動に限らず、いろいろな問題があります。廃棄物の問題だとか、いろいろあるのですが、一つ、皆さんに今日、改めてコメントしたいのは、環境問題というのは、どこから来て、どこに行くのか、というのを全てトータルで考えることだと思います。これは「ライフサイクルアセスメント」とも言います。「どこからその物は来たの?」、「それは、私たちが使用した後に、どう廃棄されていくの? なくなっていくの? なくなるの?」。エネルギーも一緒です。「エネルギーがどこから来て、どうなくなっていくのか」と。全てトータルで考えていく、そういう視点を持ってもらいたいなと思っています。今日の皆さんの提案は、とても素晴らしいものだったと思います。静聴し批判しないで、参加する、発信するという提案をもらったのは、私はとても勇気をもらえました。ありがとうございました。

中西先生：時間があまりないので、簡単にお話ししようと思います。皆さんのグループ討論では、一つ一つのグループを回りましたが、どのグループも、本当に自分の頭で、与えられた資料の中から、あるいは話の中から、考えてみるということを、徹底的にやっていたので、私はすごいなと思いました。

- 個別のポイントだけ少し触れたいと思います。新しい国際組織のようなものを作るという話がありましたが、実際、現在、国連改革の話の中で議論が進んでいます。拒否権をなくす、それから、安全保障理事会の五大国という制度をなくす、という案が続々と現在出てきていて。そうした考え方をしている人たちのグループが、かなり広く発信をし始めている。ちょうど2か月前に、私もそういう講演を国連関係者から聞く機会がありました。皆さんがそこまで思いついたのは素晴らしく、また国際社会がそういう方向に変わろうとしていることを付け加えておきたいと思います。
- それから、オスロ合意はなぜできたのかという質問をいただきましたが、簡単に言ってしまうと、絶対に実施できない合意を作ったから、簡単に物事を考える人たちが、自分たちのその場しのぎで政治を行うためにできたから、オスロ合意は結ばれたと言っていいかと思います。当時、私はそう思っていましたけれども、今まさに、イのグループとウのグループがそれに関わることをお話ししていましたが、お互いに合意できないような、お互いに納得できないものを作ったら駄目だというのはまさにそうですね。オスロ合意そのものの中に、絶対にこれは認められないと思うような内容がいっぱい含まれていました。だからそれは駄目だったんですね。だけど、無理やりそれを押し付けようとするれば、当然ながら破綻していくわけです。オスロ

合意の立役者の3人の政治家は、ある意味では、場当たりのものだから作ろうとしていて。国際社会は、それに気がつかずに、合意したから、まあうまくいこうと思った人たちもいたと思うんですが、やはり誰かが排除されたりしている。この場合、ハマスが排除されたわけですけれども、そうした人々がいれば、やはり、長い間の幸せ、和平というのが起こっていかない、ということ、現在のガザ戦争が物語っていると思います。そういう意味で、ハマスを攻撃させないとか、排除しないでいくとか、さまざまな具体的な提案なども導いていった、皆さんの発想力はすごいと感じました。私たちは、皆さんに何かのヒントを出すための、話題提供なんですね。ですから、私が授業をしたことが、皆さんがこれから、さまざまな社会問題、政治問題、国際問題に触れた時に、やはり「ここをもう少し勉強しよう」と今日思ったことを実現していくためのきっかけになったら良かったな、というふうに思っています。皆さん、長い時間お付き合いいただきましたけれども、今日は本当にありがとうございました。



